

中世と近世が
クロスする街。

福田町

ふくだまち

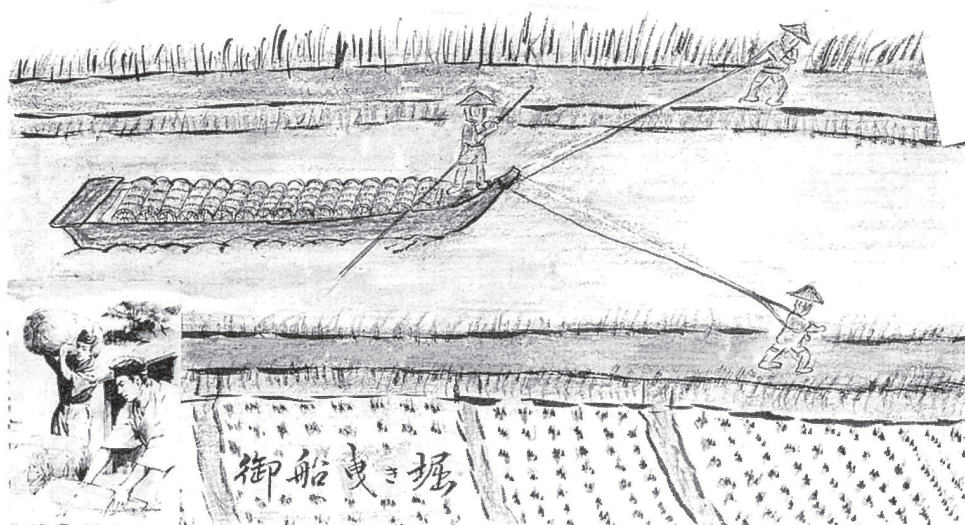


たご

船曳堀

仙台藩においては大代切り通し掘さくの11年後である寛文10年（1670年）運河を大代より蒲生まで延長した。ここ船溜りと御蔵を作り七北田川を岩切より福田町まで河川改修し、ここより東方蒲生にて太平洋に注ぐように付替した。さらに鶴巻（御蔵）から福田町の南西方を経て国道45号線の南側を通り苦竹（御蔵）まで船引堀を作った。此等は、江戸幕府の許可を得て寛文10年より13年まで4ヶ年の歳月を費してこの工事を完成したものである。その中心となったのは蒲生御蔵であった。この大工事に生命をかけて指揮監督した和田織部房長と佐々木伊兵衛によつて時の最先端の技術を駆使した工事が出来あがつたのである。福田町足軽も作業に従事した。かくして完成した運河は幅5〜8間、深さ4尺ほどで吃水の浅い高瀬船により曳夫2人が米（約48俵）や諸物資を積んで運送を行った。

船曳人夫の住まいは福田町旧45



船曳堀

号線北側（横丁）に新しく出来たのでここを新町といった。堀の修理や浚渫をしたりするとき水を落した所を辰の口といい、その下流を落し堀といった。七郷堀から流れて来る十文字堀と船曳堀の交差する所は十文字堀が隧道になっており、「オケド」といつて落し堀（梅田川）に流れていた。船曳堀は苦竹御蔵近くなる所が曲折していた。これは船を数えるためだった。曳人夫は冬でも「半ズボン」だったという。

（「高砂の歴史」より）

田村神社

坂上田村麻呂の代からあった。神社由来は不詳。建物は160年前、現在は17代目神宮、昔は神寺。明治になってから神社になる。田村神社は50坪位。

氏神様であった。地元に我妻家から寄贈された。我妻家は農家でも大家で原町の方まで自分の土地だった。

寺は小松家で管理する。

当時は東照宮、天満宮より東に

野菜売りのこと

伊藤きね子さんに聞く

伊藤きね子さんは、昭和29年に、黒川郡大和町鶴巢から田子の伊藤家へ嫁いで来ました。当時、伊藤さんの生まれた鶴巢の幕柳という地区から田子へお嫁さんに来る人はほとんどいなかったそうです。結婚後始めた野菜売りを伊藤さんは現在も続けています。

野菜売りを始めたきっかけは？

市場へ野菜を出しに行つたころ、お盆の15日で市場が休みだったため、そのままでは家に帰れず市場の近くで野菜を売つたことから始まりました。(当時は仙台駅の東口の方に市場があつたそうです。)

初めは「さおばかり」がうまくつかえず、使い方をお客さんに教えてもらったこともあつたと言っていました。

1日の生活の様子は？

朝は4時頃に起きて、畑に出て野菜をとり、それを箱につめて、6時半頃には自転車に乗つて家を出ました。

野菜を売り終えて家に戻るの
がだいたい3時頃で、それから
は田んぼや畑に出て農作業もし
ました。

お昼はお客さんのところまで
馳走になることが多かったそう
です。夜はほとんど毎日10時頃
まで縫い物など針仕事をしてい
ました。

2日おきぐらいに野菜を売り
に出かけたそうです。

どんな野菜を

売っていましたか？

きゅうり・なす・サヤ・ササ
ギ・枝豆・とうもろこし・トマ
ト・キャベツ・ネギ・ニンジ
ン・白菜・大根・菜葉(ほうれ
んそうなど) 季節によつていろ

佐藤瑞枝さんのお話

苦竹、原町を通つて宮町、山本丁方面に
売りに行きました。

町に肥を汲みに行く馬車の後にリヤカー
を紐で結び人は馬車に乗って行きました。
帰りはリヤカーを引いて、未だ道路が舗装
されない夏は裸足で歩いて来ました。

いろ……。
自転車が始まつた野菜売りが
バイクにリヤカーをつけての野
菜売りに変わり現在は国分町ま
で車で移動し、街の中はリヤカ
ーをひいて歩いているそうです。
伊藤さんが、野菜を持って行
くのをお客さんが待つていてく
れると笑顔で話してくれました。